



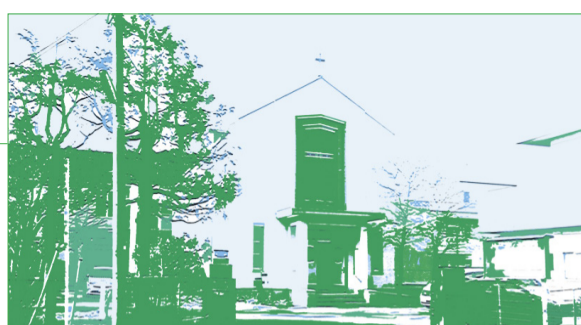
# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部

東京都世田谷区瀬田 4-16-1 Tel 03-3708-0222

主日のミサ／午前7時、午前9時半



## 聖フランシスコによる『原罪』の本質

庄司 篤 神父

聖フランシスコの教えについて書くべきこととして、私の心に真っ先に浮かんだのは、『原罪』に関する聖フランシスコの教えです。聖人は原罪の本質を次のように説明します。

主はアダムに仰せになりました。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」（創世記2・16-17）。アダムは、従順に背かない限り、罪を犯すことはなかったので、楽園のすべての木から食べることができました。次に次のような人こそ、善の知識の木から食べているのです。すなわち、自分の意志を己のものとし、自分の中で神が語ったり、行ったりされる善について誇る人です。このようにして、悪魔のそそのかしと掟の違反とによって、悪の知識の木の実になります。それで、罰を受けなければならないのです。（訓戒2）

「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」（創世記2・17）と、神様から厳しく警告されているのに、アダムだけでなく、二十一世紀に生きている私達も次の二つを行うとき、善の知識の木の実を食べているのだと、聖人は言います。

- ①自分の意志を己のものとする。
- ②自分の中で神が語ったり、行ったりされる善について誇る。

### 自由意志について

私達には自由意志が与えられています。しかし自由意志の与え主である神のお望みは、神が望まれる善を私達も自由にそれを望み・選び取り、神が望まれない悪を私達も自由に退けることです。自由意志は善いことのためにのみ用いるよう、与えられています。それで、「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」という神の御意志に従うはずなのです。ところが、悪魔の誘惑に負けて、自由意志を勝手に自分のものとし、悪魔に唆されて、神のようになろうと望んで、善の知識の木の実を食べました。

### 善の知識の木から食べることに

善の知識の木から食べるとは、自分の中で神が語ったり、行ったりされる善について誇ることだと、聖人は断言します。私達は、自分の善い言葉や善い行いを「私が語ったのだ。私が行ったのだ」と考えて、半ば無意識のうちに誇っています。しかし、実際は神が私達の中で語り、行われるのだと聖人は断言して、①と②を私達が自由意志をもって選び取り、行動するとき、善の知識の木の実を食べたのだ、そして食べた瞬間に、悪の知識の木の実になると、聖フランシスコは言います。

「神が私達の中で語ったり、行ったりされる善」とは、どういう意味でしょうか？ 私達は死んでいたら、どんな善も語れず、どんな善も行うことができません。生きていて初めて、善いことを語り、善い行いをすることができます。さて、私達は自分の力だけで生きているのでしょうか？ 地球を取り巻く空気が無かったら、水が無かったら、太陽の熱と光が無かったら、地球そのものが無かったら、私達は一日も生き続けることができません。つまり、神様が生きて行くために必要なすべてのものを与えて下さっているのです。生きることができるのです。もし、創造主である神が、恵みによって私達の存在を保ち続けて下さらなかつたら、私達は一瞬の間に無に帰してしまいます。神によって生かされている私達が自分の力だけで善いことを語り、善いことをしたと誇るのでしょうか。

「神が私達の中で語ったり、行ったりされる善」と、聖フランシスコは言います。つまり、神によって生かされている私達は、生かされているだけでなく、聖霊の照らしと導きのお蔭で、善を善として認識し、自由意志をもってそれを選び取ったうえで、その善いことを語ったり、行なったりさせて頂いているのです。だから、その善い言葉や善い行いを自分のものとして誇れないのだ、と聖フランシスコは言うのです！【注※ 聖霊はすべての人に働きかけておられます。】

命と恵みの与え主のお蔭で善を語り、善を行うことができる私達が、その善を自分のものとして誇った瞬間に、その善が悪になる。これが原罪の本質だと、聖フランシスコは言います。結局、原罪とは、『神様を尻に敷くことだ』と、言えると思います。

『広辞苑』で「[妻が夫を] 尻に敷く」という意味を調べると、「妻が夫を軽んじて我儘にふるまう」と説明されています。原罪の本質は、人間が、命と恵みの与え主である神様の権威と権能を無視して、神を排斥し、自分が神のようなものだと思い上がって、我儘に振る舞い、そうすることによって、神様を自分の尻の下に敷くのです。

原罪の本質を要約すると、「これこそ私のものだと言えるのは、自分の罪と悪徳だけです」（フランシスコの小品集、250頁、7）。「良いもの、完全な賜物はみな、神から来ます」（ヤコブ1・17参照）。それで、私達はだれも、「自分の中で神が語ったり、行ったりされる善について誇れません。」にも拘らず、その善を誇るのです！

### フランシスコの模範

以上の考察の帰結として、聖フランシスコが実践していたことは、どのような善も決して自分のものとして誇らないという生き方でした。その特徴がフランシスコの遺言の中で、はっきりと認められます。一つ一つの善い行いを自分がやったのではなく、主がさせて下さいましたと言うのです。以下、その事例（小品集、287～293頁）。

…前略…主が私に兄弟達をお委ねになりましたとき、私が何をなすべきかを教えてくれる人は、誰も居ませんでした。しかし、いと高きお方が自ら聖福音の教えに従って生活すべきことを啓示してくださいました。……主が私に会則とこれらの言葉〔遺言〕を単純かつ純粹に述べさせ、書き記させてくださったように、あなたがたも、単純に何の傍注も加えずにこれを理解し、聖なる行いをもって最後まで守ってください。…後略…

### アダムとエバの裸について

原罪を犯す前にも「アダムとエバは裸でしたが、裸であることを恥ずかしいとは思いませんでした」（創世記2・25参照）。ところが、原罪を犯した後、「アダムとエバは裸であることを知り、二人はイチジクの葉を綴り合わせ、腰を覆うものとした」（創世記3・7）。

どうしてアダムとエバは、原罪を犯す前にも裸だったのに、恥ずかしいと思わず、原罪を犯した後、裸であることを知って、腰を覆ったのでしょうか？ 聖書がいう裸とはどんな意味でしょうか？ 浅学菲才の私は、その解説をまだどこにも見つけ出していません。以下は、私の個人的な推察です。

聖書のいう裸とは、「あるがままの人間は悲惨で哀れな者、悪臭を放って嫌悪されるべき者、忘恩で邪な者だ」（聖フランシスコの小品集、270頁）ということの意味していると、私は考えます。

原罪を犯す前の二人は、神の恵みで満たされ、神との親しい友情のうちに生きさせて頂いていたので、自分の裸を恥ずかしいと思わなかったのだと、私は考えます。しかし、原罪の結果、神との友情も神の恵みもすべてを失ったので、自分が裸であることに耐えられず、何とかして自分の裸を隠そうとした、と私は考えています。

このことについて、正しい答えが別にあるかも知れません。これについて興味のある方は、どうぞ調べてみて下さい。